

九州大学学術情報リポジトリ  
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ  
Nakamura Tetsu Digital Archive

---

## 空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村, 哲、ペシャワール会 編著

空爆と「復興」 現地ワーカー報告  
(2/3、2002年)

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

---

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告, pp.150-199, 2004-05. 石風社  
バージョン：初版 2004-05-31

権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY



ペシャワールの小麦倉庫で。PMS、JAPANの文字が見える

その地で一生懸命生き抜こうとしている人々が  
いる限り、我々は可能な限りの活動を、これから  
も続けていきたい。  
(2001・12)

## 空爆下の村では 誰もが貧しかったのです

PMS副院長 ジア・ウル・ラフマン  
聞き手・福元満治 (ペシャワール会事務局)

「九月二一日、私はカーブルにいました」

——九月のアメリカでのテロ事件以来、大変な半年間だったと思います。それについてお伺いし、我々の会報にレポートしたいと思っています。よろしく願います。

まず、九月以降のPMSスタッフの努力と勇気

に対して、我々は深い感謝と敬意を持っております。特に空爆下でのカーブルでの診療の継続と食糧の配給については、本当に命がけの仕事をなさったわけです。日本ではペシャワール会の活動に対して高い評価がありますが、それは皆様方PMSの現地スタッフの活動に負うところが非常に大きいということをまず表明したいと思います。

九月一日の同時多発テロ事件が起こった時には、どこにいらっしやって、どういうことを考えられましたか。

「まず初めにPMSにおいでくださいましたことを歓迎し感謝いたします。今回のことは私達の仕事の一部でした。アフガニスタン人は日本人にとっても感謝しています。アフガニスタンでは二〇年前から戦闘による破壊が始まったのですが、欧米諸国、近隣諸国は破壊に関わったにもかかわらず、日本はそれに参加しませんでした。そして今回アフガニスタンの復興が始まって、日本の人々がまず最初に活動を始めました。そのことをアフガン人は日本の兄弟姉妹にとっても感謝しています。

二番目にご質問への答えです。九月一日のテロ事件前はタリバン政権がアフガニスタンを支配していました。欧米のメディアはアフガニスタン国内には誰も住んでいないと報道していましたが、それは全く間違いでした。多くの人々がアフガニスタン国内に住んでいます。人口は、一五〇〇万人ですが、三〇〇万人がパキスタン側に居住し五〇万人がイランにおり、残りはアフガニスタン国内に住んでいます。

私達は一〇年前から東部に、グラエヌール、グラエビーチ、ワマの三ヶ所の診療所を持っていました。ところが、二年前にドクターサーブ中村が東部を視察した時、深刻な旱魃<sup>かんばつ</sup>が発生していることに気づきました。下痢、アメーバ症などの多くの病気に人々はかかっていたのです。人々は飲み水も食べ物もなくパキスタン側に避難しようと決めていました。そこで我々はそういった人々のために水源確保計画を始めました。水があれば人々はパキスタン側に避難しようという考えを捨てるからです。



PMSの配給トラックに集まった人々

また二〇〇〇年にドクター中村はカーブルのためのプログラムの調査を始めました。カーブルはアフガニスタンの首都ですから、誰もがたくさんの援助団体が活動していると考えられるかもしれません。しかし、ドクター中村と私が調査したところ、その時点ではカーブルで活動している団体はいませんでした。私とドクター中村は政府系の病院を調査しました。その病院には全く何もありませんでした。さらに私とドクター中村はカーブル周辺を調査しましたが、予想以上に多くの人々が住んでおりずっと貧しいことがわかりました。それに何も食べる物がないこともわかりました。

そして私達は五ヶ所で診療所を始めました。毎日一〇〇人〜一五〇人を各診療所で診療するべく我々の医療スタッフが活動しました。医療スタッフから来る報告によると、栄養失調の例が非常に多いということがわかりました。妊婦に特に多いという報告もきました。そこで食糧配給計画を始めることにしました。

九月一日のニューヨークでのテロ事件が発生

した時にはカーブルにて医薬品を購入していました。当時国境に関して問題がありパキスタン側から医薬品を輸送するのが若干難しくなっていました。私達はアフガニスタンで診療活動を始めましたが、パキスタン側の国境は閉鎖していました。パキスタンでの医薬品の値段は日に日に上がっていききました。

そこでドクター中村は私にカーブル市内で医薬品を購入するようにと指示しました。中国製、イラン製の医薬品がカーブルで容易に購入できました。日増しに栄養失調の人々が増えてきましたので、調査活動と医薬品の購入に忙しくしていた頃に、アメリカの世界貿易センターや国防省でのテロ事件が起こったのです。

九月一日のテロ事件後にベシヤワールに戻って来てドクター中村と相談しました。状況が変わったが、五カ所の診療所の活動をどうしたらいいかを相談しました。ドクターサブ中村は診療所の診療活動と食糧配給の調査活動を続けるように言われました。しかし、診療所の増設について

は、状況が良くなれば再開し、状況が悪くなれば、見合わせようということでした。これが、九・一一アメリカで同時多発テロ事件が起こった頃のことです。」

「誰が本当に貧しいのかを見分けるのはとても困難でした。皆が貧しいのです」

——他の国際機関もアフガン国内に食糧を貯蔵していたのに配給できなかったと聞いています。その中でPMSは空爆下でも食糧配給を行ったわけですが、その時一番困難な問題というのは何だったのでしょうか。また、食糧配給の際のジルガ（長老会）との協力関係はどうだったのでしょうか。

「国際機関は、多くの食糧を貯蔵していました。しかし、アメリカが空爆すると発表した時点で、全ての外国人に国外退去が命ぜられました。国際機関やNGOは倉庫に施錠してアフガニスタン人の門衛だけを残して、業務を止めてアフガニスタン人職員や外国人職員は全て国外退去しました。



一家族（約10人）あたり1.5ヶ月相当の食糧を配給

しかし、我々のスタッフはカーブルに留まり続けました。

物流は通常パキスタン側から流れてくるのですが、誰もが爆撃を恐れ、それもなくなり、交通、経済も崩壊しました。残ったのは食べる物が無い本当に貧しい人達だったわけです。そこで、タリバン政府は国際機関が残して行った小麦粉倉庫のドアを壊して食糧がなくて死にかけている貧しい人々に配るように決定したわけです。なぜ人々が難民になるかというと、食べる物が無いからです。貯蔵してある小麦粉は貧しい人々に配るためにあるのだということです。

我々は政府に連絡をとって食糧配給について相談したわけです。それで、政府側から協力的な支援を受けることができました。安全確保を彼らの責任で行おうと言ってくれました。そして配給活動はペシャワール会が担当してくださいと言いました。どの場所で配るか調査している時も、スタッフの安全確保などで政府は協力してくれました。

食糧配給についての問題は二つありました。一つめは、アメリカから非常に激しい爆撃を受けていました。人々が集まる所目掛けて爆撃がされたということ、これが第一の問題でした。配給活動

中に、非常に多くの人が、殺到しました。千人以上の人が食糧を受け取りに殺到するわけです。アメリカの激しい空爆下で非常に困難な問題でした。

二番目の問題は配給対象者をどのようにして選ぶかです。私たちは本当に貧しい人に配給したいのですが、調査を始めると、例えば一つの地域の人口が二万人だとすると、その内で誰に配給すればいいのか、誰が最も貧しいかを見分けるのは非常に難しいことでした。皆が貧しいのです。調査に行ったスタッフが『この村は皆貧しい。誰に配つたらいいのかわからない』と言ってきました。また、人々が殺到したので人々やスタッフの安全確保も別の難しい問題でした。そこで、白い布に月の絵、平和のシンボルを描いた横断幕をトラックの上に掲げて、この場所で食糧をもらうことができるのと知らせるようにしました。爆撃下、

人々が配給に殺到しないようにと注意を呼びかけていました。」

### 「配給は長老会（ジルガ）とタリバンの協力で成功したのです」

——みんなが貧しい中で誰に配るかと言うのは、非常に難しい問題だったと思います。その際、どういう形で対象者を選ばれたのか、またその選択の中で、いわゆる自治組織であるジルガが何らかの形で協力したのか、千人以上が殺到した時に、安全と秩序を保ったのは誰だったのか、その点について聞かせてください。

「スタッフはミーティングで、どの場所に配給するかを話し合います。まず東部が最も貧しいから例えば東部から始めようと思います。まずその地区の治安当局に向いて我々の食糧配給プログラムについて説明しました。ところが、治安当局の答えは『それは自分たちの責任でやってください』というものでした。次にタリバンが置いている警察署に協力を求めたところ、全面的に協力しよう

と申し出てくれたのです。『この非常に危機的で最悪な状況の中で、他の団体はアフガニスタンから逃げ出している。しかし、あなた方の団体だけが残ってそういう活動を行おうとしているのだから、全面的に協力して安全を保障します』と、我々の安全に対する責任を持つと言ってくれたのです。

次に長老会（ジルガ）については、地区の長老に直接コンタクトをとりました。モスクの指導者をムラーと言うのですが、このムラーに食糧配給を実施したいと説明しました。それで、食糧配給を実施する許可を得たわけです。それでスタッフが各戸に立ち入り調査ができました。例えばドアの外で住民が『ここには三家族住んでいる。私達はとても貧しい』と言っても外側から確認することとは難しいのです。ところが私達は許可をもらいましたので、家の中に入って、家の内部の様子を見ることができ、多くの人々が住んでいるのか、いい家具があるか、貧しいのか裕福なのかを見ることができました。

誰に配るかを決めるのはスタッフにとって難しい問題でした。この村は貧しいからと選んで、その貧しい村の中でも、最も貧しい人々を選んでカードを渡し、二日後にここに食糧を受け取りに来るように言いました。ところがカードを受け取っていない人もたくさん殺到したわけです。また、他の村からも殺到してきました。ところが、私たちはこれをうまくやりぬくことができたのです。というのも警察署側から全面的協力が得られたわけですから、タリバンの兵士が安全確保をしてくれました。配給場所でロープを張って、警備員を四隅に配置し、無秩序に入ってこようとする者を止めてくれたのです。このために私達の食糧配給プログラムは非常にうまく実施することができました。

「この子は、一週間何も食べていないのです」

——カブル市民の約一〇パーセントがこのままでは餓死するのではないかとという危機感を持って、私達は食糧配給を始めました。そして、一万五千

家族に食糧を配ったわけですが、我々の食糧配給で餓死を回避できたと思いますか。

「はい、そう思います。カラエザマンハーン地区の例では、調査に行った時に『この子は、一週間何も食べていないのです』という人がいました。

激しい爆撃の中、誰も食糧を配らなければ、餓死した可能性があったわけです。外からの食糧供給が全てストップしていた状態でしたから、PMSが食糧配給を始めなければ、多くの人たちは餓死していたと思います。私たちの業績を誇ろうと思って言っているのではなく、これがカーブルの現実、真実だったのです。多くの人々（ほとんどが子供たちでした）が、危機的状況の中で餓死する恐れがあったと思います。我々の食糧配給計画で餓死を回避することができたと思います。」

—— 先程の話の中で、アメリカの空爆が人々の集まる所をめぐって攻撃してきたと言われました。

しかし、外部の報道ではアメリカが攻撃したのは軍事施設とタリバンであって、一般の民衆に対する攻撃は「誤爆」であったと伝えられています。

これについてはどう思われますか。

「その報道は完全に間違っています。カーブルにおける例をお話しましょう。例えば、カラエザマンハーン、ここには軍事施設はありません。普通の一般市民が住んでいるところです。しかし、ここが最初の標的にされまして、三軒の家が破壊されました。次にシャハリナウ地区、ここにも軍事施設はありませんが、三軒の家が爆撃されました。ワジールアクバハール地区、ここにはオフィスがたくさんあり、NGOのオフィスもあり、例えばBBCのオフィスがありました。私達のオフィスも近くにありますが、何ら軍事施設はありません。ここも攻撃されました。四番目にハイハナ地区、ここにも軍事施設はなく、米軍によって二軒の家が攻撃され一五人が死亡しました。これは決して『誤爆』などではありません。誰かが間違った情報、『あそこにアラブ人が住んでいる』という情報を伝えると、それが事実ではなくても、すぐに攻撃したのです。

北部にイヤカトウートウというところがありま



PMS

ジア・ウル・ラフマン 副院長

す。ここにも軍事施設はありませんが、激しい爆撃を受けました。ここには国連関連施設のオフィスがありますが、ここで二人の門衛が死亡しました。

マクラヤンというところも、一般市民が密集して住んでいるところですが攻撃され、子供が二人死亡しました。軍事施設はありません。

——国際社会では今回のアフガン爆撃は「正義と文明のアメリカ対極悪非道のテロリスト・タリバン」という構図の下で、米国と北部同盟がアフガ

ンの人々をタリバンの圧制から救うのだというシナリオを作り上げました。しかし先程タリバンが食糧配給計画において協力してくれたとおっしゃいました。ジア先生はタリバンの実態についてはどう思われますか。

「タリバンの時代には、私たち、私たちの家族の生命、生活は保障されていたわけです。ひとたび、上から命令が下されると、それが門衛に至るまで隅々まで伝わっていたわけです。タリバン時代には上から下まで命令が伝えられていたので、戦闘も窃盗もありませんでしたし、生命や生活が守られていました。」

**「私たちはただ貧しい人々を助けてきただけなのです」**

——ジア先生にもご家族がいらっしやいます。今日も可愛いお嬢さんと息子さんを見かけました。

今回の、特に空爆下での食糧配給、医療活動は極めて危険を伴うものでしたが、命を顧みずその活動に当たられました。ジア先生をそのように駆り



空爆によって亡くなった人々の墓標

立てたものは何だったのでしょうか。

「それは私が医師だからです。このような危機的状況の中でも我々は、政治的な問題に一切タッチしませんでした。PMSの誰もが政治的問題にタッチしなかったわけです。タリバン政権下でも、いつも貧しい人々を助けてきましたし、タリバン以前の政権下でも、私たちは貧しい人々を助けてきました。ただ貧しい人々を助けてきただけなのです。日本人スタッフもアフガニスタン国内に入って人々を助ける準備ができていました。ドクター中村も、蓮岡さん、目黒さんら全ての日本人スタッフは何回も、国内に入る許可があればアフガンに入って人々を助けたいと言いました。ドクターサーブ中村は、『これが日本本部から送ってきたお金です。これでアフガニスタンの貧しい人々を助けてくれますか。今こそ人々を助ける時です。私は医師なのですから。人々は軽傷でも亡くなっています。今こそ人々を助ける時です』と言われました。また私自身そうする必要を感じ、人を思いやる心からやったことです。

我々のリーダーはアフガニスタンから逃げ出しました。リーダーはアフガニスタンに留まりスタッフ全てはリーダーを信頼し、人々を助けました。ドクター中村は毎回『この仕事は自主的にするものです』とおっしゃいました。そのような状況、貧しい人々の状況を見れば誰でも助けると思います。」

### 「私たちは復興したいのです」

——一人のアフガン人として、今の国際社会に対して何をしてほしいと思います、何をしてほしくないと思っているかを教えてください。

「国際社会に対する要望は、まずここに来て、私達の実際の状況を見てほしいと言うことです。いろんなメディアがやってきて報道していますが、百聞は一見にしかずといえます。実際に来て実際に見てみると聞いたこととは違うことがあります。実際にやってきて、見て、今こそ人々を本当に助けてほしいのです。」

例えば日本政府は非常に熱心にアフガニスタン

の復興計画に取り組んでいるわけですが、日本の兄弟姉妹たちには直接関わってアフガンの人々を助けてほしいのです。組織を通じて援助すれば、実際に援助が貧しい人々に届かないことがあります。組織に寄付をしたとしても、組織によって組織運営のために多大な寄付が使われることがありますので、この点を本当にお願ひしたいと思います。

アフガニスタンでは二〇年以上にわたって戦争が続いてきまして、全てのシステムが破壊されました。私たちは復興したいのです。その責任が私達にはあります。直接見て直接関わって直接アフガニスタンの人々を助けてほしいというのが私の大きな要望です。実際に私達の状況を見てほしいのです、他の人やメディアを通してではなく。」

### 「ソ連が撤兵するほとんどのNGOは崩壊するか、撤退してしまいました」

——ジャ先生がPMSに参加された経緯について教えてください。また中村医師やPMSの職員に

ついてどのような印象をお持ちですか。

「一九九六年からPMSで働き始めました。その前は三つの欧米系の団体で働いていました。皆様の前だから言うわけでは決してありませんが、私はこのPMSが好きなのです。これまで働いてきた団体では、集まった寄付の約七〇パーセントが、自分たちの立派な車や住居、高い給料、立派な家具を揃えたオフィスなどに使われていました。

しかしPMSの日本人スタッフは実際に貧しい人々のために働いています。アフガニスタン東北部のワマ地区では他の団体は活動していません。

どの国の政府も活動していません。PMSだけが活動しています。私はPMSの活動が好きなのです。私たちは他の人たちがやれることはしません。他の人たちが行けるところには行きません。こういったことをPMSは実際にやっているのです。ワマには、誰も行くことができません。ドラエピーチ、チトラールにも、他の団体は行けないのです。もし多くの人たちがそこに行って活動するのであれば、私たちはそこには行きません。

ドクター中村は『四千人の会員が貧しい人達のために集めて送ってくれたお金です。慎重に大事に貧しい人々を救うために使ってください』と私達にいつも繰り返しおっしゃっています。

次に、PMSは一切政治的問題には関わっていないということです。他の団体は、ある政府ができれば協力し、別の政権になれば撤退してしまうわけです。例えばソ連がアフガニスタンを攻撃した当時、アフガニスタンには一〇〇以上のNGOが活動していました。しかし、ソ連が撤兵すると同時にそれらNGOはほとんど崩壊するか撤退してしまいました。しかし、PMSはソ連が占領している時も活動をし、撤退した後も活動を続けているのです。

PMSは一切政治問題に関わりません。政治的問題に一切かわらずにただ援助するだけです。こういうところが私は好きなのです。スタッフを代表して約束します。PMSが好きですから、PMSのために働いて人々を助けます。これは神の思召しです。皆様が貧しい人たちのためにお金

を送ってくださいます。それも神の思し召しです。私がスタッフと協力して働くのも神の思し召し、インシャッラーです。」  
(2002・4)

## 他意のない事業こそ

水源確保事業担当 目黒 丞

### 機を逸することなく支援を遂行

日本で応援してくださっている皆様、お元気でしようか。

昨年(二〇〇一年)九月の同時多発テロ、そして私たちのジャララバード撤退から半年あまりが経ちました。たった半年の間に激流のように色々な事が起こりました。ひとつの国の政権が代わり、世界中がそれに注目し、まるで映画のように演出

されました。私達の活動も多くの変化による影響を受け、対応しつつ新たな活動を行い、更に既存の活動も継続してきました。多岐にわたる活動は医療団体としての活動はもちろんの事ながら、アフガニスタンの真の現状を知る者としての活動ばかりであると感じています。

食糧配給もマラリア巡回診療も「あの地域の状況にはこういう対応が必要のはずだ」と現地を細かく想像しながらの計画立案ができました。そして全アフガニスタンから見ると小さな地域ではありますが、必要な場所に的確なタイミングで最善の援助ができたと思います。

### 国際支援の虚実

一月にジャララバードに戻り三月も終わりに近づきました。一見すると落ち着きを取り戻したようにも見えます。

確かにこのジャララバードに爆弾が落とされる心配はなくなりました。一月には時折聞こえてきたトラボローラへの爆撃の音も聞こえません。状況

は良い方向に向かっていくのでしょうか。

各国政府が資金援助に名乗りをあげ、国際援助団体が大挙して乗り込んできました。暫定政府は新体制での活動を開始し、大量の難民が帰国を始めました。耳に聞こえの良いニュースでも現地では皮肉にしか聞こえません。多額の援助資金を目当てに名前だけの団体が突然現れ、ありもしない活動報告で資金提供を要求しています。

国際団体の登場は物価と家賃の高騰を招き、千ルピー（二千元）だった家賃は三〇〇ドルになり、一日一ドル程度が平均収入の町で、英語で書かれた地図の「適正価格」が一〇ドルになりました。役職は整ったものの実務のこなし方を忘れた公務員は賄賂要求に夢中になり、帰還先の収容能力を越えるほど大量の難民がトラックに文字通り「積み込まれて」送り込まれてきます。

私の見方は悲観的過ぎるのかもしれませんが。しかし、九月以前より良い状況と感じられるのは「学校の再開」のみです。この国が向かっている方向は「さらなる混沌」のように思います。政治

的思惑によって人災と言える状況が続いています。が、天災である早魃かんばつもなお続いており收拾がつかなくなるのは予想ができません。

### 「政治や宗教を持ち込まないでほしい」

以前に私はタリバンの高官の話を聞いたことがあります。彼は大臣の一人でありジャラバードで行われた国際NGOのミーティングの席での発言でした。要約すると以下のようなものでした。

「アフガニスタンは過去に他国の干渉や侵略や影響を多数受けている。そしてすべて最悪の結果になった。侵略した英国は双方共に多数の死者を出し、ソビエトは共産主義を持ち込みクーデターが繰り返され最終的に侵略を試みて泥沼の戦闘となった。ソビエトとの戦争から内戦にかけて多くの国が武器や資金を持ち込んだが、政治的な野心によるものであり結果的に国土は荒廃し、国家としてのアフガニスタンは崩壊した。政治的野心や宣教活動（彼は共産主義も無神教のひとつと表現した）はアフガニスタンに良い結果はもたらさな

い。国際援助に最大の感謝をするが宗教や政治を持ち込まないで欲しい。」

このミーティングはSNI（シェルターナウインターナショナル）による宣教活動をタリバンが検挙するという事件の直後で、国際的非難の圧力に苦慮していた時期でもありました。私には「イスラムという共通のもので国造りをするから協力して欲しい、援助以外の目的を持ち込まないで欲しい」と聞こえました。そしてタリバン自身もアラブ人（アルカイダ）という外国勢力と関係を深めることによって減りました。

### 経済を歪める援助、ジャーナリスト

今のアフガン暫定政権は国際的に立派な組織を作ろうとしています。各大臣が任命され外交団や援助組織との会議を始めています。公務員の仕事も表面上は始まったように見えます。しかし暫定行政機構のカルザイ議長は「アメリカが連れてきたアクター（役者）」と評され、省庁の仕事は機能しておらず、地図を見て決めたような政策がは

とんどで現状に応じたものではありません。

各地では地方勢力が政府のコントロールを離れ自治を始めています。人々は今の政府を「アメリカが作った」としか考えていません。「アフガン人自身による政府」とは考えていないのです。

空爆後、最初に入国したジャーナリストやその後には大挙して押しかけた国際援助団体はアフガンの経済とかけ離れたものでした。アフガン人が一〇ドルも払わないホテルにジャーナリストは一〇〇ドル以上を払っていました。国際団体に働くアフガン人医師の月収は千ドル以上と聞きますが、アフガンでは医師の九割が失業中で他の医師は一〇〇ドルほどの収入しかないでしょう。国連組織で働く事務員は五〇〇ドル、運転手ですら二〇〇ドルの月収だそうです。PMSの水計画で働くスタッフの中ではもっとも高収入の者でも一五〇ドルもありません。それでも一般の人々の収入よりはかなり良いはずです。

私はジャーナリストと国際団体がアフガンの経済を破壊していると感じています。



旱魃下、多くの子供たちが命を落とした

「昔のアフガン人は誇り高かった」

今のアフガンは他国の援助を受けなければ生き延びることすら難しい国です。しかし経済格差の激しい国の影響を受け続ければ貧富の差が広がり、人々は外国人の施しに依存するようになってしまいうでしょう。既に子供たちは外国人を見ると「パイサ、ラーカー（お金ちょうだい）」「カラム、ラーカー（ペンちょうだい）」と手を差し出します。戦後の日本で「ギブミーチョコレート」と米兵にねだっていたのもこんな状況だったのでしょうか。スタッフの一人が悲しそうに「昔のアフガン人は誇り高かった、長い内戦がすべてを壊した」と言っていました。私は「外国人が及ぼした影響が壊した」と思いましたが言えませんでした。元々PMSの活動はあまり有名なものではありませんでした。国連や他の団体とは一線を画し、地元の人々と協力してずっと続けられてきました。それでも口コミで広がる評判で人々の支持を受けてきました。空爆前後から急に注目されましたが、少しずつ忘れられていくでしょう。我々の活動は

目立つものではありませんし、宣伝のためのもでもありませんから。

いまだに各国政府やジャーナリスト、国際団体によるお祭り騒ぎは続いています。我々には関係ありません。待っている人々の元に帰り今まで通りの活動を続けます。

PMS副院長のジア医師は以前私に言いました。「他の国は内戦中に援助と言う名目でアフガンに武器を送り、アフガンを壊してしまった。でも日本はアフガンの復興のために援助してくれる。だから私はPMSで働いているんだ。」

水計画が始まったときから水源確保事業責任者の蓮岡は「この資金は日本の政府からではなく、人々からの善意のものだ」と言ってきました。

我々のスタッフは援助してくださっている皆さんを忘れた事はありません。

今後も「日本の人々とアフガンの人々の共同作業」として継続していきます。更なるご理解およびご支援をよろしくお願い致します。

(2002・4)

## 食糧とスタッフの 無事を祈った日々

PMS看護部長 藤田千代子

### 日の丸が消えた

いつもなら年に一回か二回は休暇で日本へ帰国させてもらっているが、現地の事情に流されるままにペシャワールで過ごしている。

昨年(二〇〇一年)一〇月に始まったアフガニスタンへの空爆。ペシャワールでも反米デモがあったが私達は危険な状況には陥らなかった。それでも大勢がモスクで祈りをする金曜日の午後の外出は控えるようにした。

日本がアフガニスタン攻撃を支持、支援したこ

とを知った病院のスタッフに、日本人は通勤途中住民に襲われるかもしれないので特に女性の藤田は病院に移った方が良くと心配する者がいてしばらく院内で寝起きをした。私達は自衛隊という言葉に騙されて<sup>だま</sup>いないだろうかと感じた。現地の新聞では米軍や英軍と同じように「日本<sup>ジャパニー・アーミー</sup>軍」と出ている。アフガン攻撃の「後方支援」というのも言葉の上のまやかしで事実上の「参戦」だという感じがした。ガソリンがあるから車は走れるのだとその頃思った。

北部同盟の兵隊がペシャワール会の水源確保チームのジャラバード事務所を占拠しようとした時、私が病院でそのことをとがめる発言をしたらタジク人のスタッフが「フジタの国の日本はアメリカに加勢しているじゃないか」と返した。

パキスタンの自治区の一つバジョワールでNGOの車両が略奪され焼かれた。私達ペシャワール会がここで使っている全車両の車体には日の丸の旗が描かれている。その頃ペシャワール会が行っていたカーブルでの食糧配給の輸送トラックがペ

シャワールからカーブルへ向かう時、パキスタンとアフガニスタンの国境トルハムでの越境手続きに毎回病院の事務職員が自治区を通過して行かなければならなかった。数台の病院の車両から日の丸が消された。初めてのことであった。

日の丸とJAPANの文字が消えた車両を見て、大げさかもしれないが私の母国日本を住民に拒否されたような、侮辱されたような気がして、悲しくて涙が出た。日本にいる頃は国旗に対して特別な思い入れがあったわけではないが、そんなこととは関係なしに、現地ではこれが日本を代表する旗なのである。

インド洋にイージス艦が派遣された時は日本大使館から「現地の新聞やテレビに日の丸の旗をつけた艦体が出ていたのでじゅうぶん気をつけるように」との連絡を頂いた。やはり日の丸は消すべきだったのだろう。

どうして自分だけ避難できるだろう

空爆開始後、病院のすぐ近くにあるペシャワー

ル空港は夕方七時過ぎくらいから飛行機の発着音が突然増え、それが夜半まで続き轟音と共に窓ガラスがビーンと音を響かせていた。私は近くで爆音を聞いたことはないが、ペシヤワールで結婚式の祝いに打ちならされる本物の銃の音を近くで聞いただけでも驚きと不安を感じる。空爆、空爆と昨年一〇月以降毎日耳にした。その空爆下で爆音や軍機の飛行音を毎夜すぐそこに聞きながら恐ろしさに震えていた妊娠中の女性達がいたことを想像できるだろうか。

女性ははやく避難した方が良いという話もあったが、なかなか決心がつかないし地元スタッフの感覚を信じていた。現地の女性スタッフもいればスタッフ達の奥さんや姉妹も女性で、私となんの違いがあるのか。どうして自分だけが安全な所へ行けようかと悩んだ。パキスタンやアフガニスタンで現地の人達と一緒に仕事をしている日本人の殆どが感じたことだろう。私の片腕として看護部で働いているナースが外国人は殆ど避難しているのになぜ帰国しないのかと聞いて来た。どちらか

が生きていればこの仕事が続けられると彼は言い、私は帰国の準備を始めた。彼はどうするのかと尋ねると「自分達は行くところがない」と答えた。今考えるとなんとなく大げさな感じがする。

それからしばらくして、日本から絶え間なく訪問者があつた。私がここで働き始めてからこれも初めての体験だった。みんなが空爆のこと、これからのアフガンのことを主に話していたが、これでやっと早魃かんばつのことに気がつく人達が出てくるだろうと感じたことを覚えている。

### バーミヤン騒ぎの陰で

去年の二―三月、タリバン政府がバーミヤンにある仏教遺跡を爆破する前後のことだ。私達はペシヤワールから一時間半ほど離れたところにあるジャローザイ・アフガン難民キャンプ視察後に新たなプロジェクトを決定した。それはカーブルの国内難民に対する診療を開始することとニングラハル州での早魃に対する水源確保作業で、それに伴う予算の確保に忙しかった。特にカーブルの診



水汲みにやってきた女の子

療開始の際にはまったく予算は無く、微力と思いつながらも診療所の薬剤を買う為に病院給食の米の質をランク下げ、院内で節電節水しよう、みんなで・ちになろうとナーシングルームで話した。いつもは給食に対して不満を言っていたスタッフ達だったが誰一人文句を言う者はいなかった。

仏教遺跡破壊に対する日本での関心は、早魃で作物が育たない、飲める水が無いアフガン人達の苦痛を知ってか知らずか驚く程高かったようだ。突然新聞や週刊誌にバミヤン、仏教遺跡、タリバンと出て来ていた。おとしからニングラハル州で展開している井戸掘りの日本人青年達の苦労話や村の状況をしばしば聞いていた私はずいぶん涙もろくなっていて、彼らの体験を涙なしでは聞けなかった。

そんなある日、日本から大金を持った人が、どこかでペシャワール会のことを知り、私達の病院を訪れ、爆破された仏陀のひとかけらでも日本に持ち帰り保存したい、持ち帰れるならお金はいくらでも出す、アフガンへ入国する為に協力して欲

しいと話した。「そのお金で井戸を一本掘りませんか。そのお金を私達に下さいませんか」と言いたいのをやつのことで我慢した。現地のスタッフか日本人だったか忘れたが、誰かが「石ころと人の命とどっちが重いのだろうか」と言ったが私も同感だった。

### 政変前は少なくとも安全だった

タリバン政権が新政権に替わって食糧配給作業が突然に難しくなった。アフガン国内で活動を始める前に、タリバン政権に協力を求めたと同じように、新政権にも交渉に行った。配給前の家族調査中はこちらの申し出どおりに六名の警備員をつけてくれたものの、配給日となると四〇人以上に膨れ上がり、配給中の治安を守るよう派遣された人達が食糧を奪おうとした。どこでも全く自分達の業務を遂行しておらず、私達の配給作業に関わっていた人が、武装して食糧を奪おうとした住民に斧で頭を割られる事件も起きた。あまりの危険さにスタッフが活動できなくなり食糧配給は中

止になった。

タリバン寄りだと誤解されるかも知れないが、少なくともタリバン政権下では彼らの協力によって、配給に携わった病院スタッフのアフガン人自身が驚くほど混乱なく必要としている住民の手元に食糧を届けることが出来、タリバンもそれをとっても喜んでいたのが事実だ。

### 命がけの現地スタッフがいてこそ

食糧配給中にも日本からたくさんの訪問者をペシャワールに迎えた。小麦粉や油を積み込んだトラックがペシャワールからアフガンへ向かうのを「頑張りなさいよ」と見送って下さった方々もいてトラックに同乗した病院のスタッフは嬉しそうだった。現地を見ておられない方は、まるで私達日本人が大活躍して食糧を配っていると勘違いをしておられたのではないだろうか。食糧配給計画でパキスタン側責任者だったイクラム事務長、アフガン側責任者シア副院長に敬意を示した人は少なかつたように感じた。



食糧を満載してアフガンに向かう配給チーム

アフガンへの空爆開始前後、外国人はアフガンに入国すること、またパキスタン側の自治区を通過することさえ許されていなかったのも、私達は日本側への連絡、予算との調整、事務長や副院長が何かに躊躇<sup>ちゅうちょ</sup>する時に後ろから励ますこと、そして空爆中カーブルやニングラハル州で食糧配給をしていたスタッフの無事を祈り、彼らが無事に病院へ帰って来た時に共に喜ぶことをしただけである。

連日夜間の空爆下のカーブルでの食糧配給の第一期が終了し、第二期を開始する直前に北部同盟がカーブルのすぐ近くまで攻めて来て、もうすぐ混乱に陥るといふニュースがどんどん入るようになった。ペシャワールで私達が第二期の配給は不可能に違いないと決めかけている時にジア副院長が「ニュースと現実は違うときがあるから自分がこれからカーブルへ行き実情を見てくる」と申し出た。同行するスタッフを募ったがこの時ばかりはなかなか見つからなかった。この後もしカーブルからジア副院長の「配給を始めるから早く輸送

するように」との連絡がなければ食糧配給作業はここで中止になっていただろう。

パキスタン側ではイクラムラ事務長（パキスタン人）が小麦粉や食用油の購入、トラックの手配などすべてを受け持ち、値段の交渉などは日本人より厳しく少しでも多くアフガンへ輸送しようとした。一部の日本からの訪問者が、こんなに努力しているスタッフを無視に近い態度で接するのを見ると、胸が痛んだ。中には見下したようなあからさまな態度をとる人もいた。これがアフガン人やパキスタン人でなく西洋人だとしても同じように接するのだろうかと考えた。確かに日本の多くの方々の援助なしにはこの計画は実行出来なかったが一方地元スタッフの命がけの作業がなければ本当に糧を必要としている人々の手元には届けられなかった。

### 緑の大地計画……まさにこれだ！

カーブルやニングラハル州での食糧配給に携わりながらの反面、気持ちのどこかに「いつまでも

この人達は食糧配給に頼って生活をするのだろうか」という暗い疑問があった。早魘で作物が取れなければ仕方がない。そんなことを考えながら悶々としていた所に中村医師が「緑の大地計画」、そして灌漑用水路、農業復興、自給自足という言葉を口にされた。その時はまさに「これだ！」と叫びだしたいくらいの感動を覚えた。なんというすばらしいプログラムだろうか。

「緑の大地」と言葉はとても美しいが、現在井戸掘りをしている人達の肉体的な労力はもちろんだが、現地に溶け込んで地元スタッフの士気を高め効率よく作業を進め維持する為の精神的労力は、並大抵のものではないように見える。グラエヌールでは農業復興も本格的に始まりつつあり、日本から専門家や有志の方々が作業を始めた。数日前に調査を終え帰国した農業専門家の方はある部門においては「短くて七年かかるでしょうなあー。でもとても希望がある」と私達にも希望を与えてくれた。気長に「緑の大地計画」に関わって行きたい。

従来の山岳地帯での医療活動におとしから水源確保の井戸掘り作業が始まり、食糧配給作業があり、今、農業復興（自給自足）計画が加わった。こうして見ると私達はどんどん医療の原点に向かって動いている。人間が生きるに最低限必要な水に食糧。そしてこれらを求めている人々がすぐ隣の地に実際に存在していることがわかる。そんな人一人にでも緑の大地計画を聞いた時に感じた希望を分け合いたいと切に思う。

福岡のペシャワール会事務局から日本側でたくさんの方々から支援が集まっていると連絡があり、それをペシャワールで小麦粉と油と薬品に変えてトラックを送り出す時、こんな場面に遭遇させてもらって良いのだろうかと感じるほどに日本側と現地が一体になって作業をした。

日本を誇りに思う。ここに居ると自分の国日本をととても意識していることに気がつく。

皆様から届いた支援がここで働く私達日本人ワーカーにそして何よりも現地のスタッフにどれほど多くの力を与え彼らを勇気ある行動へ導いた

かは、ご自分で想像されにくいと思う。この紙面を借りて私達の活動に協力して下さっているたくさんの方々から感謝を述べたい。ありがとうございました。  
(2002・7)

## 今こそスタッフの基礎訓練を

PMS院長代理・看護部長 藤田千代子

### スタッフも揺れた一年

皆さま、お元気でお過ごしでしょうか。

今年はいつもの夏のような激しい日照りが少なく珍しく風が吹く日が多く、八月は殆どどんよりとした天気で日照時間がとても少なく感じました。それでもペシャワールは雨は数回しか降らず今に至ります。



内戦で徹底的に破壊されたカーブル

昨年（二〇〇一年）の今ごろは一〇月七日に始まった隣国アフガニスタンへの連夜の空爆にカーブルで働く診療所のスタッフや食糧配給作業をしているスタッフの安全を願う毎日でした。あれから一年たった今でもこちらの新聞にはアフガニスタン内での空爆や部族同士の紛争、米軍基地の襲撃などが週に数回は報道されています。PMSでは、北部同盟側の政府職員が多数を占めるカーブルへ家族を移す職員や退職者が続々と出ましたが、数名の候補者を残しやや落ち着いて来ましたが、殆どが非パシュトゥン（族）のアフガン人スタッフでしたが、約三〇名退職しました。病院の近くにある二つの大きなアフガン難民居住区カッチャガリとナーシルバークから、いわゆるアフガン難民と呼ばれていた人達が消え、土レンガで立てられていた住居はパキスタン政府の計画によって見事に潰され、すっぱりとなくなり広大な砂漠のようになっていきます。

私達のスタッフの多くのアフガン人は、ペシヤワールでは親戚の二家族で家を借りて家賃を折半

し、仕事で男性が不在の時お互いに助け合って生活しています。片方の家族がアフガンへ帰る事になり困った人もいます。またアフガン人学校が閉鎖され子供の教育に困りカブールへ引っ越す人もいます。退職の申し出があると、特にここでナースのトレーニングをしたスタッフには愛着もありましたので残念に思えました。しかし彼らの殆どがカブールの診療所や病院で働いている様なので、ここでのトレーニングがアフガニスタンで活かされているかと思うと最近では嬉しく思えるようになりました。

### 診療の質

こんな中で様子を観察しながら、人員を補充することなくパキスタン側診療所やアフガン側診療所では診療が続けられました。検査技師やナースは以前のようには三ヶ月に一回診療所勤務というローテーションが今では当然のように一ヶ月おきになっています。

しかし診療所でも病院でも診療の質の改善の必

要が最近やや感じられるようになりました。

先月は医師やナースが少し気をつければ何とか助かった死亡患者が二名いました。他の病院へ転送するため患者が庭で病院の車の準備を待っている間に死亡してしまいました。病室を出る寸前で酸素吸入をしていたのを退室と同時に中止にしたのです。又、下痢を一日数十回している乳児の母親が、心配のあまり下痢を止める為麻薬のような薬剤を（民間療法で使われているらしい）飲ませてしまい乳児が昏睡状態になってしまいました。翌日母親は昏睡から醒めかけた乳児をドクターの説得も受け入れず強引に連れて帰り後でその子供は死亡したと知らされました。ドクターは以前より下痢の回数は減って来ていた、死亡する時期ではなかったと言っていました。診療所では頭部裂傷の患者の縫合を医師ではなくベテランナースでもなく、トレーニングもまだ受けておらず持針器を手にした事もない手術室勤務の看護士の訓練生が行っており驚いてしまいました。



水と食糧の欠乏が多くの子供たちの命を奪った

「これがこの国の現状なのだ」

これまでの驚きと怒りを事務長に話すと、

「パキスタンの公的病院ではこんな風景はいくらでもある。日本のメディカルワーカーとパキスタンやアフガニスタンのワーカーはずいぶん違う。第一パキスタンでは一旦病院が退院と決めたその時からいくら重症でも患者や家族は酸素や車輦など必要な物は全部自分で準備しなければならない。病院の庭で、死にかけた患者が数人座って診察を待っているのはよく見かける光景だ。私達はベシヤワール会の方針で重症患者には酸素吸入をしながら車輦で移送しているが、パキスタンの公的病院の実態はこういうものだ。」

話を聞いていて思い出しましたが、確かにハンセン病の家族検査に行っていたスワットやディール地方の電気やガスのない山村では（時には市街でも）、らい診療所員や看護師たちが「ドクターサーブ」と呼ばれ診療行為をしていて診療所を開いている人もいました。いろいろ問題は感じたものの、医者のない地域で彼らは住民に頼りにさ

れていました。

八月にチトラール北部にあるPMSのラシウト診療所に行きました。医師は毎月交代で勤務しましたが、ここ三年程はナースは主に地元出身のスタッフにまかせっきりのような感じてしたので、当然と言うか、やはりスタッフが「ドクターサーブ」と呼ばれていて、彼が診断して薬剤を処方している所を見かけました。

余談ですが久しぶりに見たラシウトは馬で診療所までたどり着いていた所がジープに代わり、夜間のみの送電も始まっていて、ランタンで過ごした頃が懐かしく思われました。

### 今こそ基地病院での教育が重要

昨年からカールブルの臨時診療所や食糧配給、マラリア診療チーム派遣などアフガニスタンの緊急作業に没頭していましたが、緊急な活動が終わりアフガニスタンでの飲料用、灌漑用井戸掘りとそれに伴う農業復興計画、医療活動等長期的活動が続けられ、退職していくスタッフの間隔も開き一

息ついた今、ラシウトやグラエヌール診療所など山岳地域にある診療所を見ると、基地病院であり教育の場でもあるPMSの存在の重さを再認識します。現在の病院の建物に移る前に、私達が一般の住宅を借りてハンセン病の診療を行っている頃に見学に来た事のある人が現病院へ再び訪れると決まって「すぐ立派な病院になって、スタッフも以前よりしっかりして見える」と褒めてくれますが、それは見かけだけであって先述のような事が簡単に起きてしまうのです。この建物が出来上がる前に中村医師が「建物は貝の殻みたいなもの、中身がないとね」とよく言っておられたのを最近しばしば思い出しています。まだまだトレーニングと経験が必要に思われます。

### 必要なのは最低限のこと

ここでは決して日本のような水準の高い看護を求めている訳ではなく、最低限必要とされる事をスタッフに求めていると思います。ハンセン病患者のケアや検査も取りあえずは定着して来ていま



ドラエヌールの灌漑用井戸を視察する中村と藤田

すが、質の向上が求められています。幸いに今年夏から検査室に日本人検査技師が加わり、また今年一月に看護師一名、来春は二名の医師が日本から派遣されてくる予定になっています。私達多くのワーカーは、初めの内は何も出来ない気がしたり、現地のスタッフが何でも出来ているように見えたりして、自分が本場にここに必要なのだろうか、ここで何の役にたっているのだろうか、何の為に自分はここにいるのだろうかと悩んだりします。現地のスタッフを嫌いになります。

ここに来て数年してから気がつきましたが日本人スタッフが一緒に働く事で（その存在だけでも）現地はかなり士気が高まります。私達も現地のスタッフからいろいろな刺激を受け学ぶ事も多くあります。それをお互いに診療や看護行為に還元できれば良いと考えています。

### 希望に溢れる村々

七月にはドラエヌールの灌漑用井戸や飲料水井戸、試験農場を見に行きました。写真では数え切

れないほど見ていたのですが、実際に見る直径五メートルの灌漑用井戸とその周りに広がる農園は、その又周りに広がる砂漠化した広大な土地の中にあるオアシスのようでした。

掘削中の他の灌漑用井戸はちょうど深さ四メートルを超した所でした。その井戸掘り作業の責任を持つエンジニアや掘削作業員、又その周辺に住んでいて毎日作業を見に来ているというババ（おじいさん）達の表情が、期待感にあふれていたのが印象的でした。周りの畑はカチカチに乾燥しひび割れ、木は立ち枯れていましたが、そこには明るさ（この表現はびつたりではない、もっと希望がたくさんあふれているような感じ）がありました。最近、グラエヌールで農業計画の作物を担当している日本人の専門家、高橋さんの話では、試験農場の一部では水のやり過ぎで根腐れがおきているので、うまく水を使えば今の倍の畑に水供給が出来るそうです。

アフガン空爆と政権交代に一つの転機を迎えた「緑の大地計画」を進めるPMSの事業は、ス

タッフや作業地域の住民間、その他に起こる多くの問題を一つずつ解決しながら着実に確実に進んでいます。

どうぞこれからもご支援をお願い致します。

（2002・10）

## NGOのするべき仕事とは

水源確保事業担当 日黒 丞

「ソビエトが攻めて来たときと同じだ……。」  
お元気でしょうか？ ジャララバードのスタッフ一同、皆様の変わらぬご支援の下、日々がんばっております。

空爆開始より一年が経ち、表面的にはアフガンスタンの状況は落ち着いてきたかのように見えます

すが、人々の心は傷ついたままで、不安感・不信感が募りつつあるように見えます。

アルカイダ搜索のための米軍機は我が物顔に飛び回り、銃を構えた米兵を乗せたジープがジャラバードの街を巡回するようになりました。九月三〇日にはトルコ軍の兵隊を乗せたジープが十数台もジャラバードに姿を見せました。

私も偶然、街に出ていたために迷彩色のジープの一団を見ることができました。黒い覆面にサングラスをかけており、重機関銃を握り締めたトルコ兵にとって、ジャラバードの街に来る事は敵地か占領地に来るような気分だったのでしよう、私から見ても緊張しているのが伝わってきました。事前には一切の情報がなかったためISAF（国際治安支援部隊）としてジャラバードに来たのかどうかわかりませんでした。

そばにいたエンジニアの一人が「ソビエトが攻めて来たときと同じだ、あの時もいきなり兵隊が乗り込んできた……」と私に言いました。人々も同じ気持ちだったのでしょう。その光景を見てい

たジャラバードの人々の顔には恐怖と不安が浮かんでいました。現在のアフガンにおいてハリジイ（外国人）という言葉は侵略者を指すかのように感じます。

### ハリジイ（外国人）としての節度

我々PMS（ベシャワール会医療サービス）にもジャラバードオフィスだけで日本人ワーカーというハリジイが六人います。ありがたいことに私がアフガンに来てからの二年間は、PMSを狙って攻撃された事はありません。その理由は我々が他の外国人たちと明確に違う集団だったからです。我々と他の外国人（他のNGOやジャーナリスト、外国人兵士）との違いはアフガン人とアフガン社会への接し方、関わり方、そして姿勢だと思います。接し方、関わり方、姿勢というのは言葉にするのは簡単ですが、実際に現地で活動する日本人ワーカーが適切な振る舞いを身につけるのはとても難しいことです。

二年前に私がアフガンに入った時も当時の責任



PMSの活動地域を飛行する米軍ヘリ

者だった蓮岡氏に「まだお前はアフガンについて何も知らない。今のお前がエンジニアに指示をすると邪魔にしなければならない。一切の口出しをするな。先<sup>\*</sup>ずは自分が役立たずだということを実感しろ。アフガン社会を知って、雰囲気をつかめるようになるまで質問と挨拶以外はできないと思っていよう」と言われました。

日本で友人だった彼の言葉には驚かされましたが、今になって考えるととても適切な意見だったと感じます。我々ハリジイはアフガン社会にとって理由はどうあれ異分子には違いがないのです。

現在、たくさんのNGOが活動しています。海外からのNGOはテロ以降、大幅に増えました。大半の外国人ワーカーは一生懸命になって何かをやるうとしているのですが、私から見てアフガン社会にはそぐわないものがほとんどです。というより、アフガン社会をまだ理解していないのでしょう。欧米とは価値観が全く違います。

去年のテロの直後に取材に来た日本の大手新聞社の記者に「識字率の低い連中と仕事をするのは

大変でしょう？」と言われ殴りたくなった事があります。確かに識字教育は大切です。しかしそれが人間性を測る基準にはなりません。

アフガン北部でNGOが作った女学校が焼き討ちされたという報道を聞きました。私には地元の理解を得ずにやった結果だとしか感じませんでした。タリバン政権ですら女性の識字教育は必要だと言っていました。

### 「識字教育は絶対必要。だけど……」

以前にタリバンの僧侶と井戸の交渉を行なったときに出了た話ですが、「字が読めなくてはコーランも理解できない。識字教育は絶対に必要だ。だけれどその前に治安が安定する事と最低限の生活水準を保証することが必要だ。ミスター目黒はイスラム教徒じゃないから知らないと思うが、娘に字を教えるのは父親の大切な義務のひとつだし、もし妻がコーランを読めなければ夫が責任を持って字を教えるのも義務の一つなんだ」と言っていました。

我々は、地元の責任者と交渉して理解を得てから作業を始めることを最重要視しています。きちんとした関係を作れば焼き討ちなどには遭いません。

ドラエヌールにグラムモハマッドというレイバーがいます。レイバーとは月給制の正式スタッフとは違い、現場で雇用する作業員で日当契約です。彼は働き者で正直、体格も大きく、難しい井戸があると私が彼に依頼して特別派遣してきました。現在は診療所増築の現場で責任者であるエンジニアのアシスタントとして働いています。他のレイバーを引っ張るリーダーシップもあり、責任感もあるので、エンジニアにも好かれています。

彼を正式スタッフのサイトエンジニア（現場監督）として雇用しようかと考えた事があったのですが彼は読み書きができずレポートの作成ができないため実現しませんでした。

その時に彼は「あなた達からもらった給料で俺は家族を支える事ができているし、子供達は安心して学校に行き始めた。俺が字を読むことよりも



青空教室で学ぶアフガンの子どもたち

子供に勉強させる方が俺にとっては嬉しい。何より俺は日本人といっしょに働くのが嬉しいんだ」と言いました。

アフガン人はとても誇り高い人々です。彼らに對して字が読めなくてかわいそうと思うことは失礼であり、彼らの誇りを傷つける事になります。アフガン人と接して彼らの考え方を知ること、その上で必要な物が何なのかを考える事が一番大事なことだと思います。仮に識字教育を始めるとしても、どのような形であればアフガン社会に受け入れられるのか、考える必要があります。

### 涸れた井戸を放置

最近、NGOにできることとはなんだろうかとよく考えます。我々は二年程で八〇〇本以上の井戸を掘りました。この数字は確かに大きなものですし、他のNGOでは不可能と言ってもいいでしょう。しかしNGOが去る時には何が残るのでしょうか。我々は去るつもりなどありませんが、他のNGOが作った井戸を見ていると余計に考え

させられます。

完成した後は放置され一切のメンテナンスもされず、水は涸れてしまいポンプも壊れたままの井戸が無数にあります。井戸には作ったNGOの名前が残されており、看板が立っているものまであります。涸れ果てた井戸に名前が残ることを恥と感じないのだろうかと思います。

我々PMSの井戸も涸れます。ウォーターループで深く水深を取っている井戸ですら涸れています。九月末の時点ではソルフロッド郡の井戸三二二本のうち五七本で水位が下がり使えなくなっていました。既に一度は完成した井戸なので一ヶ月もかからずに掘り直す事はできます。しかし掘り直しをいつまで続けることになるのだろうかと思うと悲しくもなりました。アフガン人達のNGOへの依存体質を作ってしまったのではないか、とも思いました。

そんな時にソルフロッド郡のバラバーク村から連絡が来ました。「涸れた井戸の掘り直しでボーリング機械を使わないで欲しい」というものです。

この連絡には驚きました。

中村医師の『医者井戸を掘る』の最後の部分に書かれている村ですが、我々がソルフロッドでも一番苦労した土地です。以前のバラバーク村は井戸が掘れない土地として有名でした。海外NGOが入るようになりボーリングでなら井戸が掘れるようになりました。しかしボーリングの井戸はポンプが壊れると水を汲み上げる事はできず、涸れてしまっても手で掘りなおすことができません。バラバーク村の人々は時間がかかっても手で掘って作った井戸ならば掘り直しができるし、ポンプがなくてもロープで水を汲み上げることができると知ったのです。自分達で維持するにはどうしたらいいのかを学んだのです。

### 「これこそがNGOの仕事だ。」

アチン郡では完成した井戸を住民に引き渡しています。現在の規模ではアチンでの維持作業が困難なので、完成と同時に村の長老会に道具を渡し、維持の責任を引き継いで来ました。

この引き渡しは住民にとって、「PMSは撤退しようとしている」と受け取られる可能性もあります。今の能力では維持しきれないので、数年後に必ず戻ると言っても、外国人の口約束の軽さをアフガン人はよく知っています。逃げ出すというように受け取られるのではないかと危惧していました。

しかし彼らの反応は全く違いました。

ある長老から「今までに色々な組織が来た。NGOも国連も来た。しかし彼らはよくわからないような仕事を少しだけして看板を立てて去っていった。宣伝する為にやっているかレポートを書くための仕事としか思えない。あなた達は井戸の掘り方を教えてくれた。完成するまで手伝ってくれた。完成したら道具まで置いていくと言う。後は我々でできる。学んだ事を他の村人や子供達に教えていける。あなた達の仕事は正しかった。これこそがNGOの仕事だ」と言われました。

「これこそがNGOの仕事だ」という言葉は、パシュトゥー語では「ダ NGO カール デイ」

と発音します。この部分に彼が力を込めて私に言いました。

我々は、現時点で必要な飲料水を確保するという事業を通して、少しずつでも大きな希望を与えることができたのではないのでしょうか。自立できるといふ希望、ハリジイという異分子に頼らずとも生きていく希望。たった二年しか過ごしていない若僧が希望を与えるなんておがましいことです。が、戦後の荒れ果てた日本を祖父母や父母の代がどのように苦しんでどのように復興してきたのかをアフガンの人々に伝えたいと思います。

外国の援助に頼るのではなく、誇りを持って自立して欲しい。

私は戦争を知らない世代ですが、アフガニスタンで戦争によって生み出されるものを知りました。憎しみが生み出すものの悲惨さを知りました。日本で支えてくださる多くの方々の気持ちも同じだと思っています。

これからも変わらぬご支援をお願いします。

## パイロットファームは 収穫のまつ盛り

農業計画担当 橋本康範

### 命の水の音

「ドッドドッドドッド」。井戸水を汲み上げるパイプの重厚なエンジン音が足下から辺り一面に響き渡る。程なくして水の流れる音がかすかに、しかし、確実に聞こえてくる。

「命の水」の到来だ。それらはあたかも体内の動き、エンジン音は心臓の鼓動、水の流れは血液の流れのようだ。そうなのだ、この水はまぎれもなく「命の水」なのだ。小高い丘に通称「D1」と呼ばれる灌漑用の井戸（直径五メートル、深さ

約二〇メートル）があり、そこから南側、「川下」に位置するPMSのパイロットファーム（試験農場）のひとつ、約三五〇〇平方メートルの畑に「命の水」が供給されるのである。

ここはグラエヌール、ブディアライ村。周りには川と呼ぶには悲惨すぎるほど干上がり、石だらけの「川跡」があり、またここ数年耕されず、村人が足を踏み入れることすら忘れてしまったような畑が遠くまで広がる。そんな中でパイロットファームの作物の緑が映える。この風景を周りの様子と同時に眺めると、実際目の当たりにし、何度見ても未だなかなか素直に受け止められず、とにかく奇跡としか言いようがない。ブディアライ村のパイロットファームではトウモロコシ（Bourbar 種）、飼料用作物ソルゴー（ハイブリットソルゴー種・ラッキーソルゴーII種）、ブドウ（Keshnishi 種・Tor-Garna 種）、そしてお茶を栽培している。

カライシャヒ村にあるPMSのもうひとつのパイロットファームは、周りをいくつかの畑に囲ま



試験農場で耕作に励む橋本と現地ファーマー

れてはいるが、少し下流に下るとあつという間に乾いた大地に突き当たる。ここではパイロットファームから一・五キロメートル上流に行つたところから湧き出す水を灌漑用として利用している。この付近ではこの水の争奪戦が激しく、二週間待っても全く水が来ないということもしばしばである。約四五〇〇平方メートルあるカライシャヒ村のパイロットファームではトウモロコシ(Boubar 種・Ghourri 種・8025 種・3032 種・アフガン産ローカル種)、大豆 (It-D-400 種・V-Kharif 種) を栽培している。

### 地元の関心も高く

これらのパイロットファームを中心に PMS の農業計画は進行している。現在、当計画では六名のスタッフ(ワリー・現地農業技師、アキルシャール・ブディアライ村試験農場ファーマー、ラティーフ・カライシャヒ村試験農場ファーマー、日本にいる専門家として高橋修氏・農業、稲田定重氏・畜産、そして現地日本人スタッフ川口拓真<sup>たくま</sup>)

君、橋本）で活動している。

ブディアイライ村のファーマー、アキルシャーはベテランのファーマーらしく、メリハリの利いた仕事振りを見せてくれる。また、ユーモアのセンスに溢れ、ラバーブ（弦が一七あり、ギターのよくな中央アジアの代表的な楽器）の演奏家としても非凡な才能を見せる。カライシャヒ村のファーマー、ラティーフは細かい点に良く気が利き、常に最良の結果が出るよう頭をめぐらせる一方、かなりのパワーの持ち主で、これまでに何度も無理だと思われる力技を可能にしてきた。現地農業技師のワリーは誠実で、何事にも一所懸命、そして熱い男である。こんな気持ちの良い現地スタッフに囲まれているからこそ、日本人スタッフ二名、時に現地のほうに足を運んでくれる日本人専門家の方々も常に頑張ることができるのである。

## 幻が現実に！

今はどちらのパイロットファームでも収穫に忙しく、同時にその刈り取った作物を家畜用の餌と

して保存しておくサイレージの準備に追われている。また、ささやかながら収穫物をみんなで味見する「収穫祭」も各パイロットファームで、そしてグラエヌールの診療所で行なった。そこにはファーマー、ファーマーの親戚、近所の者、そしてPMSスタッフが参加した。また、パイロットファームに関する地域住民の関心は高く、ほぼ毎日のようにパイロットファームに顔を覗かせる農民や村人、実を採って（盗<sup>と</sup>って？）家に持ち帰る子供や女性、今回作付けした作物の種子を譲り受けたいと申し出る農民などが数多くいる。

吹き抜ける風のさわやかさとそのときささやく木々の葉がなんとも心地よく、大げさに聞こえるかもしれないが、一瞬にして人を神秘の世界へ誘うほどの魔力がここグラエヌールにはある。何もかもが幻かと思わせられる事が何度もある。先日撒いたアルファルファの小さな芽がブディアイライ村、カライシャヒ村の両パイロットファームの畑一面に顔をのぞかせ始めた。グラエヌールでまたひとつの幻が現実になるうとしている。

“ドッドドッドドッド” 足下から響く心臓の鼓動が…… “ドッドドッドドッド”。

(2002・10)

## 魅力ある農場を目指す

半年間の成果と今後の取組

農業指導員 高橋 修

### (1) 技術的な確認事項

今年(二〇〇二年)の春「緑の大地計画」の核としてパイロットファーム(試験農場)がスタートしたが、この半年間はまさに手探りの状況で経過してきた。しかし今回の訪問で、おぼろげながら技術的な課題とか改善の方向が見えてきたように感じている。列記すると次の通りである。

①当初、パキスタンから導入したコーン四品種の内の二品種、豆類二品種(二種類)、日本から導入したソルゴー二品種の内の一品種は地域適応性が確認できたので、今後一般農家への普及に努めていく。今後、今秋播種したアルファルファ、イタリアン・ライグラスとともに、コーンの四月播き品種、大豆の大粒品種及び甘藷<sup>かんしょ</sup>の種芋を新たに日本から導入して適応性を検討する。

②灌漑用水の制約によって、栽培農地が限られているに関わらず意外に土地利用率が低い。例えば五月中旬に麦刈り後七月一日前後にならなければコーンを播かない等である。理由は中途半端な時期の播種はコーンが実らないとのことである。ローカル品種の特性によるものと考えられるので、日本で専門家と相談して四月播き品種を導入し、更に麦間播種方式で土地利用率を高める技術を試みる。

③ラッキーソルゴーIIの高収量性が確認できたので、来年は四月播として年四〜五回刈りを試みる(今年は七月上旬播種で年三回刈り)。なお

来（2003年）春のパイロットファーム作付計画

|         | 圃場<br>番号 | 面積<br>(a) | 作 物                   | 品 種                   | 作付時期                 | 備 考                                   |
|---------|----------|-----------|-----------------------|-----------------------|----------------------|---------------------------------------|
| カライシャヒ村 | 1        | 4.7       | ソルゴー                  | ラッキーソルゴーⅡ             | 来春4月                 | 年4回刈りを目標にする                           |
|         | 2        | 5.6       | コーン                   | P F 産、日本産             | 同上5月                 |                                       |
|         | 3        | 11.2      | アルファルファ<br>イタリアンライグラス | ツユワカバ<br>ワセフドウ        | 今秋10月                | 混播                                    |
|         | 4        | 3.4       | 同上                    | ツユワカバ<br>ワセホープ        | 同上                   | 混播                                    |
|         | 5        | 5.7       | 豆類                    | P F 産、日本産、<br>インドネシア産 | 来春5月                 | 詳細未定                                  |
|         | 6        | 7.9       |                       |                       |                      |                                       |
|         | 7        | 6.7       | 小麦<br>コーン             | ローカル種<br>日本産          | 今秋11月<br>来春4月        | 今秋小麦を条播とし、来春コーンを条間<br>に播種             |
| ブデアライ村  | 1        | 6.7       | アルファルファ               | ツユワカバ                 | 今秋10月                |                                       |
|         | 2        | 4.3       | 小麦                    | ローカル種                 | 今秋11月                | 今秋小麦を条播とし、来春コーンを条間<br>に播種             |
|         | 3        | 5.0       | コーン                   | 日本産                   | 来春4月                 |                                       |
|         | 4        | 4.1       | ソルゴー                  | ラッキーソルゴーⅡ             | 来春4月                 | 年4～5回刈りを目標にする                         |
|         | 5        | 3.4       |                       |                       |                      |                                       |
|         | 6        | 4.0       | アルファルファ<br>芋類（ブドウ）    | ツユワカバ<br>甘藷、馬鈴薯       | 今秋10月<br>来春3月(来秋11月) | 幅1.5mの畦に播種<br>幅1.0mの畦に植え付け(芋類の後に植え付け) |
|         | 7        | 6.0       | アルファルファ<br>豆類（ブドウ）    | ツユワカバ<br>P F・日本産      | 今秋10月<br>来春5月(来秋11月) | 幅1.5mの畦に播種<br>幅1.0mの畦に播種(豆類の後に植え付け)   |

この構想はブデアライ村のパイロットファーム担当農家のアイデアに基づくものである。

④ブドウについては、圃場と定植区画も確定したので、穂木の提供者及びPMS病院の庭師と十分連携しながら、穂木の保存、挿木時期等技術的な判断を誤らないよう注意しながら着実に準備を進めていく。

⑤茶については失敗と困難が続いている。特に硫黄華によるpH調整効果の発現が遅れている。専門家によればもう少し時間がかかるとのことであるが、未熟有機物の施用、pH7井戸水による灌水、耕耘による硫黄華と有機物の分解促進、ほうれん草と小松菜栽培による石灰分の吸収除去、両野菜に対する硫酸アンモニウム、硫酸カリウムの施用等、pH低下に向けてあらゆる手段を講じていく。

また、茶苗提供を約束してくれているパキスタンの農業研究所と、機会を作って連携を深めるように努めていく。

⑥過剰な灌水による用水の浪費に止まらず発芽・生育障害が発生している。特にカライシャヒ

村のパイロットファームの豆類において著しい。

このため今後、パイロットファーム担当農家に對して適正灌水量の指導を徹底するとともに、原則的に豆科作物は畦立栽培で、また稻科作物は平畦栽培で対応する。

⑦一般に耕土が10〜15cmと浅く、根の伸長を妨げまた早魃被害を助長している。特にトラクター耕起の圃場が浅いように見受けられる。今後浅耕と深耕との比較展示等によって深耕の必要性を啓蒙していく。

⑧土壌中の有機物が極端に少なく、低収量と早魃被害の一因となっている。家畜飼料の確保で一杯でありまた畜糞の燃料化によって有機物確保が困難な情勢にあるが、パイロットファームでの比較展示等によって有機物施用の効果を啓蒙していく。場合によっては夏場の飼料が豊富な時期に、緑肥作物の栽培が必要になるかも知れない。

⑨早魃被害の軽減を目的に実施した不耕起栽培は、生育遅延とか低収等問題があるので、今後は実施しない。

## (2) 来春の作付計画

前項の技術的な確認事項に基づいて、来春の両パイロットファームにおける作付計画を協議した。圃場別の栽培計画は別表の通りであるが、節水技術と地力増強対策及び土地の有効利用をベースに置き、食用作物、飼料作物の増収を目標に置きながら、一部に永年作物を取り入れるスタンスで取り組むこととした。

パイロットファームの技術ソースは、中長期的に見て現地の先進事例が最も有益である。ジャララバードからグラエヌールに向かう道中、橋を渡った付近に優れた農業地帯があるので、是非そこで一、二戸親しい農家を作ってノウハウを得て欲しいと橋本さんに依頼した。

## (3) 運営上の留意事項

①来年は「緑の大地計画」の二年目に入るので、少しずつ具体化を図らなければならぬと考え、研修の開始及び研修対象者の選定について日本人関係者のみで協議した。



定期的に現地を訪問し指導にあたる高橋指導員（右から二人目）

その結果、パイロットファームが魅力のある教材になり得るかどうかが基本であること、パイロットファームが成功すれば必ず一般農家の関心が高まること、その段階であれば適切な研修対象者の選定が容易であること、研修対象者は三〇歳代後半から四〇歳代が適当であること、を確認し来年度中の研修開始に向けて、当面パイロットファームの充実に主眼を置くこととした。またパイロットファームの技術内容を一般農家に周知するため、各圃場毎に技術内容の要点を現地語と英語で書いた看板を立てることとした。看板の内容はミスター・ワリーに案を作らせることとなった。

②パイロットファーム担当農家との契約がまだ終わっていないようである。担当農家の要求（労賃、超過時間手当等）がエスカレートする兆しがある（カライシャヒ村）。橋本さん川口さんはかなり厳しく対応されているが、それにも自ら限界があるう。できるだけ早く文書での契約を終わる必要がある。

日当も労賃も資器材費もPMSが負担・貸与し、

かつ生産物の半分を担当農家が受取る仕組みの中  
では、パイロットファームの成果が上がったとし  
てもその成果は普及性に乏しい。担当農家が頑張  
れば収益が上がる仕組みがないかと考えてみたが、  
今のところ名案が浮かばない。私としても早急に  
検討してみたい。現地でも是非ご検討いただきた  
いと思っている。

## 終わりに

取り急ぎ報告書を取りまとめたが、欠落とか間  
違いも多いと思っている。また独断と偏見もかな  
りあるのでは非ご意見をいただきたいと願ってい  
る。

終わりに、多くの皆さんのご配慮で毎日を楽し  
く過ごすことができ、また体調にも恵まれて業務  
を遂行できたことに感謝を申し上げ報告を終わる。

(2002・10)

## 百年一日の如き国

農業指導員 高橋 修

### 「歴史」と「伝統」

私たちが農業計画を進めるに当たって、いくつ  
か気を付けていることがあります。

その第一は、アフガニスタンの農村社会に深く  
息づいている「歴史」と「伝統」を大切にしなけ  
ればならないということです。

例えば、農村社会はジルガと呼ばれるムラの長  
老会が秩序維持の要となっており、またそれぞれ  
の家では、すでに現役を退いた年長の男子が厳然  
として一家を取り仕切っています。いつの頃から  
ジルガが存在し、また家父長制度が採られてきた



旱魃により干上がった田畑

のか分かりませんが、恐らく原型はシルクロードの昔から、厳しい自然と部族間の闘争に耐え抜くために生まれてきた制度なのでしょう。もし私たちがジルガを無視したムラの取り決めに関わったり、家父長の意見を軽視して若者の考えだけを重視すると、必ず反動が出てくる恐れがあると判断しました。

第二は、農業経営の姿もまた歴史と伝統が色濃く受け継がれており、一挙に新しい農業の形と技術を持ち込んでも受け入れられないと考えました。

今年（二〇〇二年）の九月、私は約七〇年前に当時農林省の職員であった尾崎三雄さん（故人）

が写されたアフガニスタン各地の写真と、農村と農業の状況を克明に記録されたメモを見せていただく機会がありました（その後、『日本人が見た'30年代のアフガン』として石風社より刊行）。その七〇年前の写真・記録と現在の状況とを比較すると、全体に緑と花が少なくなっていることを除いて、畑の形も作られている作物も、農具も農業の仕方も、まさに『百年一日の如く』ほとんど

変わっていないのです。

第三は、私たちはアフガニスタンにおける農業経験は皆無です。日本とは自然条件と社会的条件が全く異なる現地では、農家の経験と意見を尊重して進めないと失敗すると考えました。

### 農は一日にして成らず

もともと農業は永年の経験がものを言う仕事です。日本でも農業の専門教育を受けた若者が、就農後すぐに音を上げる例が多いことからもお分かりいただけるでしょう。また農業は、それぞれの土地の気象・土壌・水利などの自然条件とか、資材調達・生産物の販売などの社会的条件に制約されています。いかに新しい作物を取り入れようとしても自然条件に合わなければ収量は上がりません。また自然条件に合った作物であっても、生産に必要な資材が買えなかったり、生産物の販売方法が無い場合には経営として成り立ちません。農業は、単に技術があればできる、儲かるといった仕事ではないのです。少しくどくなりましたが、

このことはアフガニスタンに限らず日本でも大変重要なことなのです。

以上述べてきましたように、アフガニスタンの農村社会と農業の現状は、他所者の私どもからすると一見不合理で遅れているように見えますが、アフガニスタンには、歴史と伝統に培われた農村の仕組みと、アフガニスタン流の農業が存在し、農家はそのことに自信と誇りを持っています。不合理に見えても、よく確かめてみるとその裏側には必ず何かの理由があります。このため私たちは、日本人の物差しに当てはまらなくても、まず現在のアフガニスタンの農村の仕組みと、農業のやり方を正面から受け止め、そこから徐々に改善していかなければならないと考えてきました。一足飛びに、新しい技術と方法を持ち込めないところに農業計画の難しさがあると思っています。それでは次に、農業計画は今日まで何をどのようにしてやってきたかを説明します。



飼料作物の栽培も重要課題

## ジルガと協力して候補地探し

まず第一に、パイロットファーム（試験農場）の設置と場所の選定から取りかかりました。パイロットファームとは新しい作物とか改良技術を農家に見せるための、いわゆる「展示圃」です。この作業は、以前から地域に溶け込んで活躍しておられる目黒さんに進めていただきました。目黒さんによりますと、まずダラエヌール溪谷内のジルガに集まって貰って趣旨を説明して基本的な了承を得、設置場所についても意見交換をしてもらったとのこと。全員大賛成であったと聞いています。その背景には、永年の医療活動と二〇〇〇年七月から開始された水源確保事業によって、ペシャワール会に対する厚い信頼感が培われていたからと想像しています。

続いて目黒さんに行なっていたいたのは、パイロットファームの設置場所の確定と担当農家の選定でした。この作業は、水源確保事業に携わっている地元出身の有力スタッフと相談しながら進めてきたとのこと。このスタッフはムラの中

の事情に詳しく、またムラの中で人望のある人材です。

もしペシャワール会が、直接パイロットファームと担当農家の選定を行っていたならば、相当物議を醸し、あるいはパイロットファームの設置は不可能であったかもしれません。

第二に私たちが行った作業は、作物栽培の状況と土壌・水質の実態調査です。私たちは土壌調査を兼ねてグラエヌール溪谷の北から南まで畑を歩き、栽培されている作物と生育状況を観察しました。また現地スタッフ中心に北部・中部・南部で計六戸を対象に、作物の栽培状況について聞き取り調査を行いました。これらの調査の目的は、パイロットファームに入れる作物の種類を何にするか、技術改善のポイントをどこに置くか、技術のレベルをどの程度にするかなどを探るために行なったものです。事前に行なった畑の観察結果と重ね合わせていろいろ質問し、実態と問題点がかなり把握できたように思っています。

第三は、いよいよパイロットファームの作付と

栽培展示です。導入する作物は、まず地域の重点作物である小麦、玉蜀黍トウモロコシ、飼料作物を取り上げました。更に小面積ですが新しい作物として豆類を導入し、また今後芋類とブドウの作付を予定しています。つまり第一段階の重点作物は昔から地域に馴染みのある作物を取り上げ、農家の栽培経験のない作物は小面積に止めるよう心がけています。改良品種の種子・種苗はできるだけ自然条件が似通っているパキスタンから導入しましたが、一部日本から持ち込んだ品種もあります。

栽培技術については専門的になりますので内容を省略しますが、考え方としては、現地調達できない資機材は使わないで、できるだけ現地で手に入る物を利用することとしています。例えば、作物の新芽に着生するアブラムシ（俗名ヌカ虫）の防除のために、農薬を使わずに、タバコの吸い殻液を散布して駆除したなど、いろいろと考えながら現地に合った技術を工夫してきました。

## 水をめぐって

次にパイロットファームでのハプニング・トピックを紹介しましょう。

これまでに一つだけ、現地の習慣に逆らって厳しく対応した事柄があります。それは水の使い方です。現地ではカレーズ（伝統的な横穴式の井戸）から湧き出てきた水を、順次畑に導いて灌水しています。農家のやり方を見ていると、いったん自分の畑に順番が来ると三〜五時間水を入れ続け、相当水の無駄遣いをしています。このため中には水分過剰で根腐れを起こしている畑もありました。もともと水が少ない地域ですので、この際タップリ灌水しておこうとの心理が働いているのです。折角ベシャワール会が苦勞して確保した水です。上手に使えば今の倍の面積が灌水できると判断し、「灌水は一五分以内に」と喧しく指導してきました。気持ちには理解してくれたようですが、まだ抵抗感が残っているように感じています。

## かわいい泥棒とシロアリ騒ぎ

これまでパイロットファームでいくつか困ったことが起こりました。

その一つは、パキスタンから持ち込んだササゲ（現地では大豆の一種になっている）の収穫が近づいた頃、パイロットファームの近くの子供、時には大人も混じって、勝手にマメの熟した莢さやを選んで収穫（泥棒）していくのです。中には堂々と前垂れいっぱいに持っていく子供もいました。もともと親戚とか隣近所が助け合う風習ですのでそれほど罪悪感がないのかも知れません。しかし、私たちがいかにアフガニスタンの風習を尊重すると言っても、これでは収量も分かりませんし、また来年の配付用の種子が確保できませんので、毎朝早く（泥棒の先手を打って）収穫して貰うよう担当農家に頼みました。

もう一つトラブルを紹介しましょう。パイロットファームで飼料作物を播いていたときのことです。苦勞して畑の準備をして種を播き、灌水しやれやれ終わったと思った直後、どこからともなく

現れた大型の熱帯シロアリの大軍が、せっせと種を穴の中に運び込んでいるではありませんか。二、三日後見に行きましたら今度は残っている種から出た新芽までどんどんと運び込んでいるのです。もう憎くて憎くて足で踏みつけましたが到底追いつくものではありません。この飼料作物は日本から持ち込んだ種類ですが、こんなところにも新しいことに対する障害が出てくるものと肝に銘じました。いま農薬を使わないで蟻を防ぐ方法がないか考えているところです。

以上のパイロットファームの取組みと並行して、私たちはサイレージの作成を進めてきました。サイレージとは、二、三センチに切った飼料作物を穴の中に詰め込んで乳酸発酵させ、冬用の家畜飼料を確保する大変重要な作業です。アフガニスタンの農家にとっては未知の技術で、また私自身も六〇年前の子供の頃に経験しただけです。で、農家も私たちも緊張のしっぱなしでした。いろいろエピソードがありますが、残念ながら紙数が無くなりましたのでまたの機会にご報告したいと思い

ます。

数百年前から現在まで連綿と、昨日から今日と変わることなく続いている悠久の風土の中に、私たちは農業計画と言う一石を投じました。アフガニスタンの歴史と伝統の重み、厳しい自然条件と社会的条件に照らせばさやかな取組みかも分かりませんが、農業計画を通じて少しでも人々の意識が変わり、また中核となってくれる人材が育てば、必ず彼ら自身の手で希望に満ちた農村に生まれ変わると信じています。私たちはその事を夢に見ながら、明日からもまた、自らを励ましつつこの道を歩み続けていきたいと考えています。

(2002・12)